

癌性髄膜症の診断法について知見を深める

Diagnostic accuracy of cerebrospinal fluid liquid biopsy and MRI for leptomeningeal metastases in solid cancers: A systematic review and meta-analysis

Nakasu Yら Neurooncol Adv. 2023 Mar 5;5(1):vdad002.

紹介担当 新須磨病院 近藤 威

(ガンマナイフ同志)

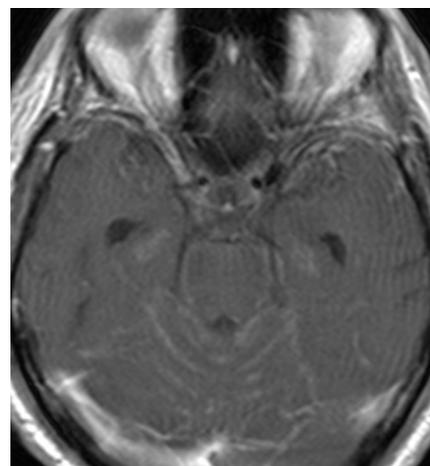
岡村一心堂 蓮井光一、青山総合病院 水松真一郎、
国立循環器病研究センター 森久恵、洛西シミズ病院 川邊 拓也、
大田記念病院 中崎清之



癌性髄膜症 (LM) の診断方法のシステマティックレビュー

【この報告の独自性】

複数ある癌性髄膜症の診断法の感度・特異度を過去の文献から英国のヨーク大学が登録するPRSPEROに登録した上で、レビューを実施した。



癌性髄膜症の例

【結果の要点】

10施設の研究が対象

	感度	特異度
circulating tumor cells	87.0%	93.8%
cell-free tumor DNA	97.9%	89.0%
MRI	59.4%	97.6%
cytology	71.9%	100%

各ガンマナイフ治療医の意見

- 緩和ケア主体だが、長期予後を目指すsubgroupも出始めている。
- 脳表病変は実質内か鑑別困難。無症候性でも積極的治療をすべき。
- 期待は薬物療法。
- 癌性髄膜症の説明は非常に躊躇う。
- 硬膜転移で経過が良い経験がある。
- 造影MRI以外にFLAIRや拡散強調画像も有用。